討論（一）

（遠見＝司会）　幅の広い内容で、しかも大変緻密な報告をいただいた。いろいろ御質問がおありだろうと思うので、島崎さんから御報告いただく前にちょっと二～三〇分質問していただく。

（安原）　「人為的構築」というのは、どういうところで出てくるか。それが一つと、それから農村と村落というのを分けたのは、農村社会と村落社会とどういう違いが考えられるのか。

（似田貝）　「人為的構築」というのは、ルイ・ナポレオンの『フリュメール一八日』の中にある。それからその次の農村社会と村落社会というのは、私はあまり厳密に分けたわけではなくて、村落研究ということを、農村研究と総合的に置き換えただけで、それほど別に史的内容を込めて使ったわけではなく、ただ並列的に言っただけである。

（高橋）　都市と農村の対立、あるいはその対立の指標という場合に、分業という発想と、両者が融合していくという発想は、現実政策面ではないのか。理論的にはあるわけである。都市と農村の分業という考え方。それともう一つ、「分業の廃止」という思想があったが、その中で精神労働と肉体労働の対立の廃止というような、そういう思想が、似田貝さんの議論の中では落ちていたと思う。それをどういう具合に位置づけられるか。

（似田貝）　逆に質問したいが、「融合」といっている場合には、どういう内容を指すか。例えば、スターリンが都市と農村の分業というものから融合化政策に変えるという、そういう表現での「融合」か。

（高橋）　いいや、例えば、反デューリングの中で、資本主義生産の発展が、都市と融合の基礎を準備しているのだと、水力は地方的で電力は全国的であるというような。

（似田貝）　僕は、「融合」ということは、結局都市と農村のいわば変革に向けての分業と同じことだろうと思ったわけである。であるから「融合」というのは言葉が違うだけで、厳密にはやはり「分業」という言葉が正しいだろうと僕は解釈した。それからもう一つ「分業の廃止」という思想の問題であるが、どちらかというとエンゲルスがこういう分業論をもっていただろうと思うが、僕は分業を廃止するというのが新しいコミューンだというふうには決して思わない。

（高橋）　つまりその場合に「分業の廃止」というのは、いろんな仕事があるというものを廃止するという意味ではない。人間の能力の決め手を廃止するという意味での廃止するという思想があると思う。

（似田貝）　その場合の「分業」というのは、つまりネガな意味として使われているならば、僕の使っている「分業」はむしろマルクスが明るく当てて た側面に限定をした。

（高橋）　分業論をもとにしていたそういう能力の一元化というような問題も取り入れてくると、何かもう少し農村を考える場合に、ある種の教育だとか文化だとかそういう問題も考慮に入れられてくるようになるのではないかという気もしたもので。

（戎野）　「地域開発」という概念は、考え方によっては広くも狭くもなると思うが、どういうふうな概念規定で、ここでお話しになな

ったのか。というのは「土地改革」というものも、いわゆる「地域開発」にとっては含めることもできるし別にすることもできる。非常に対立的な概念として「土地改革」というものを出されているが、ちょっとその辺の「地域開発」の概念がはっきりしないもので。

（似田貝）　いくつかの例を出すと、つまり「地域開発」という場合の認識根拠としては、例えば西洋ヨーロッパの近代化過程というものを考えてみると、封建的土地所有だとか共同体的土地所有の廃棄というか、そういった限りでの「土地改革」という問題と、自然成長的な農村のいわば「局地的分業」という問題が近代ヨーロッパの過程の中ではあったと思う。この場合には「土地変革」という問題と、それを僕は「地域開発」と言い換えたのであるが、それがいわば同時進行的に進む。で、それが近代化なり民主化というか、そういう価値理念の担い手をも構成してくる要件になったのだろうと思う。ただしこの場合はあくまでも自然成長的だと言えるわけで、つまり後進国の問題については、それは自然成長的では絶対にあり得ないわけである。あり得ない場合には、さきほど地域開発の前提を申し上げたが、意図的に「地域開発」という問題と「土地改革」という問題を計画的に結び付けていく発想を出さざるを得ないだろうと思う。それが「地域開発」と「土地変革」という問題を区別する一つの理由であるが、つまり近代ヨーロッパの場合には、もちろん近代ヨーロッパが全部良いとか悪いとかということではなくて、認識根拠として良いところだけを取ってくれれば、土地改革と農村工業とのいわば同時併進的な決定的な相互作用というか、そういったものがみられるからあえて「地域開発」なんて言い方をしなくてもいいだろうと思う。ただ例として、これ大塚さんから孫読みしたのであるが、ダニエル・デフォーが、後進スコットランドにやはり綿密な計画論をたてているような例があって、その場合には「土地改革」という問題と綿密な「市場構想」というものを合わせた計画論というものをダニエル・デフォーが後進スコットランドに適用している。それと同じような意味で土地改革だけやっても、解放されてくる農民が、いわば生産力を担って、しかも民主化とか近代化というものを担う層をつくるためには、根底的には生産力の「草の根の変革」がなければ、価値創出ということは恐らくあり得ないだろう。だとすると、土地だけ解放されて、ひどい話が中国の例を取るが、農民の土地は変わったが、生産するための農具とかそういったものは全く都市に依存しなければいけない。したがって初期の中国の改革でいけば、結果的には土地は改革されたけれども都市の農業労働者としてやはり出ていかなければいけなかった。この場合には、やはり社会主義的変革へ向けての農村問題としては問題があるだろうと思う。

（戎野）　そうすると、ちょっと極論的な言い方であるが、「地域開発」というと、自然発生的な、自然成長的なヨーロッパの場合と対比すると、例えば「局地的分業」とか、あるいは産業の発展の諸条件をつくるという意味の「開発」というふうに解釈してよいか。

（似田貝）　ええ、私の報告の場合には非常に大きな落し穴があって、それをまず告白した方がよいが、一つどうしてもわからないのは、認識根拠としては「地域開発」と「土地改革」という組合せが特に後進国の場合には意図的に計画されなければいけないだろう。それは特に例えば近代化とか民主化とか、あるいは社会主義への変革に向けてという課題をたてるにしてもやはり重要だろうと思うが、

一方で、工業生産力というのがこれだけ圧倒的に強くなった場合の農村なり農業というか、あるいは村落というものが、なおかつ農業の生産力を上げながら、村落という一つの地域社会をつくるには、これだけの現段階ではどうしたらよいのかというのは、実は僕もよくわからない。ただ、それがもっと後進国、例えばアジアとかアフリカとかの場合にはまだこの理論はたてられるだろうと思うが、日本の場合に本当にこれどうしていったらいいのかというのは、僕自身もあまりよくわからない。ただ、一つは、そういう歴史的可能性があった段階だというふうに認定するとすれば、戦後の農地改革というのは、少なくとも戦前の伝統的な資本主義だとか、あるいは国民経済的には跛行型の構造をもっていたものを変革するチャンスはあったと思う。その場合に、土地改革というものと、それから解放された農民の地域経済なり地域開発をつくっていくということが同時に出なかったことが、昭和三〇年、三五年、あるいは現段階にやはり問題になってきているのだろうと思うが、そうすると、現段階は確かに土地改革ということは明らかになってくるけれども、それがこれだけ工業部門が圧倒的に生産力をもってきている段階で、農業と工業の同時併進的な地域をつくっていくというのは、一体どういう像を考えればいいのか。それはちょっとまた僕自身もよくわからない。例えば上からのヤッていけば、インテグレーションみたいな格好で、農業でタマゴだとかいろいろなものを作って、それをそこの中で処理して、一定の自給的なものと、あとは市場に出すだけだという上からのインテグレーションというのは、ある意味でそういったもののモデル、つまり上からとしてはモデルが出てきているのだろうと思うが、下からといった場合に、どういうことになるのか、僕自身が考えているので、問題として保留していただきたい。

（安原）　レーニンとスターリン、毛沢東をもふくめてあげておられるが、その場合にスターリンの都市偏重型政策と実権派都市中心政策と言った場合、工業、つまり重工業だとかいう言葉に言い換えた場合はどういう形をとっていったらよいのか。五ケ年計画が要するに工業偏重になると考えられるとか、あるいは都市偏重という場合に、「都市偏重」と「工業偏重」とは……

（似田貝）　それは同じである。というのは、例えば中国の場合、つまり旧植民地時代の遺産を前提として工業化が進められたと思う。ということは、例えば上海とか重慶という、つまり旧植民地時代の工業政策をそのまま使って工業化していった。したがってその工業化というのは、革命以前の、つまり中国の都市を中心としてやったということであるから、それは同じことだと思う。であるからレーニンとスターリンの場合にも、もちろんロシアの場合には昔から二つの道みたいなものがあると思うが、農村からやっていくのか都市からやっていくのかということで言えば、前史としてはツァーによる工業化政策というのが当然あった。で、ツァーによる工業化政策というのは、やはり都市中心だったわけである。それはレーニンの『ロシアの発展』の一番後に表があるが、あの表では確かに農村部においても資本主義的な発展がみられるという、基本論調はそこであるが、データ的には、都市がやはり圧倒的に多い工業化を示している。それは恐らくツァーリのやった工業化政策、都市を中心とした工業政策というものが、同時に工業化政策であった。僕は、それがスターリンの場合に、それを逆に言えば受け継ぐという格好になったかと思う。

（蓮見）　それでは、島崎さんの御報告をうかがってから、また討論していただく。